地域の教育資源を活用した小学校と地域及び水族館との年間を通した連携授業の構築と実践

○井上美紀・園山貴之[1] 福住繁[2]，高田浩二[3]
([1] 下関市立しものせき水族館，下関市立垢田小学校[2]，海と博物館研究所[3])

はじめに

これまで下関市立しものせき水族館「海響館」（以下、当館）では、2019 年より新たに地域の教育資源を活用した地域連携型の海洋教育プログラムの構築を開始した。2021 年は下関市立養治小学校第 3 学年 20 名を対象とし、年間で実施される「総合的な学習の時間（以下、総合学習）」の半分となる約 35 時間を使い、「みんなで応援！～来て！見て！知って！海響館～」のプログラムの構築及び実践を行った。

目的

児童が小学校の地域学習において水族館の多様な利用を通じて、生き物や環境などを効果的に学ぶ。また、学校側のねらいは総合学習とキャリア教育の年間計画に基づいて、児童が主体的及び探求的に学ぶことにより、地域の特色や下関市の魚「フグ」を知り、フグや当館の魅力を伝えるためにできることを考え実践する力を育むことなどとした。

プログラムの実践内容

本プログラムは地域の教育資源として下関市の魚「フグ」を軸に構築し、教材化を目指した。当館が学習コーディネーターとなり、複数の多様な地域の人々が授業に関わりをもつ年間を通した総合学習における授業計画を提案し、教職員から学校側のねらい、育みたい力などの意見を反映し、教職員と当館スタッフが実践した。また、学習の進行に合わせ、担任教諭の判断で国語や社会の教科も取り入れ、より理解が深まるように学習内容を随時追加した。1 学期は導入として仕事の内容や「フグ」との関わりを知ることをねらい、下関のフグ食文化や当館で飼育展示されている生き物について学んだ。2 学期はフグを通して仕事の様子や工夫、仕事への思いを知ることをねらいにとし、連続 5 回の地域の人々との交流学習を実施した。各回、異なるフグに関わる仕事をしているゲストティーチャーとして招き、それぞれ、①「みせる（当館展示部のフグ担当者）」、②「捕まえる（フグ延縄の漁師）」、③「つくる（『ふぐ提灯』製作会社）」、④「調べる（フグ毒の研究者、大学講師）」、⑤「売る（仲買人、フグ処理師）」の 5 つのテーマとした。さらに校区内を散策しながら、フグにまつわるモノやコト（マンホールやお店の看板など）を探し、水族館でのフグに関する学習を振り返りながら様々な種類のフグを観察した。3 学期は学んだことを伝える力を育むことをねらいに、児童は「海響館こども学芸員」認定を目指し、これまで調べたことをグループごとに発表会を実施した。発表会準備の過程で「知ってほしいことを話すときの『話し方』、『動き』を学ぼう」をめあてに水族館の解説イベントを見学した。「海響館こども学芸員」認定後は、当館の魅力を発信することを目的に館内で展示会を開催し、児童が制作した作品を児童自身で「展示する」ことを体験した。

評価

学校教育に沿う学習のねらいや育みたい力などを踏まえて水族館の利用方法を本プログラムで組み立てたことで、毎回異なった学習のねらいをもって水族館を利用した学習ができ、当館が目的とする水族館の多様な利用方法を学校と連携して実施できた。学校側の評価として、「児童が楽しみながら主体的に課題をもって探求的に学ぶことができ、本プログラムを基盤に学級経営ができた」、「違った視点で教育活動ができ、学校教育の中で海洋教育を

取り入れることができた」、「探求的に学習する方法を見いだせた」などの回答があった。保護者へのアンケート調査では水族館に対しての価値観の変化がみられ、回答があった 11 名中 10 名が、家庭で児童から「総合学習」または「フグ」の授業の話題があった、当館の教育活動への印象が変わった、水族館を活用した地域学習の機会が増えるとの回答があり、「子どもたちに海の魅力を伝えてほしい」や「今後も学習を続けてほしい」など当館への期待も現れていた。

これらのことから地域の特色である「フグ」を活用した本プログラムを軸に、「フグ」の生態を水族館で学び、「フグ」と地域との関わりを国語や社会の授業、学級経営、学級活動、キャリア教育を通して学ぶことができ、児童の主体的及び探求的に学ぶ行動へ変容をもたらすことができた。今後は短期プログラムに再編したものを下関市内の小学校数校へ実践していく予定である。

下関市の魚「フグ」探し

地域の人々との交流
ふぐ処理師によるトラフグをさばく実演

これまでの学習をまとめた発表会

図工の授業で
木を用いて制作した作品